昨日は思い出、そして、明日へ

高村恵美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昨日は思い出、そして、明日へ

【Ｎコード】
Ｎ０８６７Ａ

【作者名】
高村恵美

【あらすじ】
大学入学と同時に、同じサークルに所属することになった阪田真司と付き合うようになった杏。しかし、３年生の夏、ささいなけんかから、２年続いた関係を断ち切ってしまう。その後、文化祭で再会した望に、杏は想いを募らせる……。

『それで、彼と一緒にいるのが辛くて、別れを切り出したの。』
『うん、それで？』
『1年半たって、今ごろ気付くのも遅いかも知れないけど、』
『うん？』
『一番放しちゃいけない人の手を放しちゃったんだなと思う。』
『後悔しているの？』
『してないと言えば、嘘になる。でも、今どうこう言っても、何も変わらないから。』
『そうだね。泣きたい？』
『たまにはね。』
『いつでも胸くらい貸すよ？』
『気持ちだけもらっておくわ。私には、彼がいるから。』
『あぁ、大阪の彼ね？』
『うん。正確に言えば、滋賀だけど。そろそろ遅いから、落ちるね。おやすみ。』
『おやすみ。よい夢を。』
そんな会話が終わったところで、私はパソコンの電源を落とした。
「うっわ、2時半だ。」
そう呟いて電気を消すと、布団に潜り込んだ。
「うん……、眠れない……。」
布団に入ってから2時間たつが、私は寝つけずに、何回も寝返りを打っていた。
無理に眠ろうとすればするほど、逆に目が冴えてしまう。私が眠れないのには、理由があった。
（どうしてるかな……？）
無理に眠ろうとするのをやめて、枕元のテーブルに置いてあるアロマポットの皿にお湯を入れ、ラベンダーのオイルを垂らした。ラ

ベンダーの香りには、鎮静作用があるから、その内に眠れるだろう。
キャンドルに火をつけて、もう1度、ベッドに横になる。
その内にうとうとと眠気が襲ってきて、いつの間にか、私は眠りに落ちていた。

約4年前

私は大学の入学式の後に、チラシをもらった心理学研究会のお花見（実際は桜の下でお酒を飲むだけ。桜はおまけ）に来ていた。特に興味があるわけじゃないけど、1年生は参加費無料だから、この際、食費削減に協力してもらおう。
「ま、杏ちゃん、色々食べてみて。」
「はい、いただきます。」
そう言って、私は先輩たちが作ってきたお弁当の卵焼きに箸をのばした。
「はい、お酒。弱いから、初めてでも飲めるよ。」
先輩がプラスチックのコップに、カシスソーダを作ってくれた。
「杏ちゃんは、何科なの？」
「文学部の史学科で、東洋史です。」
「へぇ、俺は経営学部だよ。」
このお花見で偶然出会って、一緒にこのサークルに入部したのが、私と同じ文学部で、哲学科の阪田真司だった。
趣味や好きなバンドなどが同じことがきっかけで、私たちはどんどん仲良くなり、7月の初めには付き合うようになった。

それからは、ほぼ毎日お昼ご飯を一緒に食べたり、休日には買い物に行ったりして、すごく仲が良かった。だけど、その関係に陰りが見え始めたのは、それから1年後の、2年生の夏だった。

真司は2年生の6月、他の部員とトラブルを起こし、サークルを辞めて、私が心理学研究会に残った。彼はその後、ずっとやりたがっていた、11月に行なわれる学園祭の実行委員になり、忙しくなっていった。

じっとしているのが苦手な彼の性格には、座って文献研究をするサークルよりも、自分で動いて何かを作り出す、そんな学園祭のスタッフの方が、よっぽど合っていたのかも知れない。

しかし、夏休みを過ぎると、学園祭の準備が忙しくなり、私と会って話す時間はどんどんなくなっていった。

「今日も？」

『うん。仕事してたら、終電に乗り遅れたんだ。』

10月の初めには、そう言って、下宿している私の部屋に泊まりに来ることも珍しくなくなった。ただ、泊まりに来ても、何を話すわけでもなく、隣のコンビニで買ってきたお弁当を食べて、お風呂に入ったら、すぐに寝るのが当たり前になった。

それでも私は、「疲れているんだから。」と自分に言い聞かせて、文句の一つも言わなかった。今思えば、この時、もっと我儘を言ってみても良かったと思う。

学園祭が終わるとすぐに、1つ上の先輩がサークルを引退し、私が幹部になってからは、もっと忙しくなった。真司は委員会を辞めたけど、その年の9月11日、アメリカでテロが発生したことで、アメリカがアフガニスタンへ軍を出すか否かで揉め、真司は、出兵に反対するための運動に参加するようになったからだった。

「俺、アメリカに行く。」

真司がそう言ったのは、2年生の春休み。もうすぐ、桜が咲き出しそうな、暖かい日だった。

その一言で、私は、彼が何を考えているかを悟った。

「え……？」

真司は戦争とかが大嫌いで、特に、貧しい国に対する戦争には、あからさまな嫌悪を示していた。要するに、弱いものいじめが嫌いだった。私も、そんな真司の、真っ直ぐな性格が好きだった。だけど、この時は、少し勝手が違った。

アメリカはまだ、テロの発生が警戒されていて、とても治安がいいとは言えない状態。そんな所に行くと言い出したのだ。

これには当然、普段、「真司の決めたことには、それなりの理由があって、誰もそれを止めることができない。」とよくわかっている私にしては珍しく、泣いて反対した。

「真司が、出兵することに猛反対しているのは知ってる。でも、それよりも、私にとっては、真司がアメリカに行くことの方が辛い。行かないで。なんで、いきなり言い出すの？残される身にもなってよ。真司は行ってやりたいことをできるけど、もし、テロとかで死んじゃったりしたら……。」

「死んだりなんかしないよ。大丈夫だから。」

結局、彼はアメリカへ行くことはなかったけど、私には不安が残った。「このまま、またどこかへ行ってしまうのではないか。」と。

3年生になり、授業を受ける学舎が替わり、自宅から2時間かけて通っていた真司も、さすがにきつくなり、学校から自転車で１０分くらいの所に下宿するようになった。

私も学校の近くのマンションに引っ越し、それからは、毎週火・土曜日に、どちらかの部屋に泊まるようになった。

しかし、真司の部屋には困ったことがあった。部屋が汚いのである。床には授業のプリントやルーズリーフが散らばり、飲みかけのペットボトルの紅茶には、白いものが浮いていることも珍しくない。台所には使った食器が山積みになっていた。こんなことは、そう珍しくはない。彼の実家に泊まった時も、朝、部屋へ起こしに行くと、ゴミの中に布団を敷いて寝ている状態だった。

私は真司の部屋に行くと、毎回、ご飯を作る前に、食器を片づけるのが習慣になった。もしかしたら、これが悪かったのかも知れない。真司の散らかし癖は、全く直らなかったのだ。

散らかった部屋、どこかへ行ってしまいそうな不安、コミュニケーションの不足。これらがストレスとなって、私達をいつの間にか追いつめていた。さらに私には、サークルでのもめ事、幹部としての重圧も加わっていた。

その後、元々身体が丈夫というわけではない私は、5月の半ばから微熱と吐き気、鬱症状に悩まされるようになり、6月から夏休みまで、サークルを休むことにした。

「美味しかったね～。」

「うん。」

私は、真司の家に来て、ご飯を作って食べ終わった。

テレビでは、ニュースのアナウンサーが、今日もアフガニスタンでの出兵に対して、日本の首相が発言した、素人でもアメリカ追従と言えるコメントについて、毒を吐いている。

「それじゃ、とりあえず洗濯物とか片づけてね。」

私は使った食器を持って台所に立つ。食器を洗う隣で、普段は自分でご飯を作らない（作れない）真司のために、蒟蒻と油揚げの煮物を作る。

その時、テレビの前で、何かを殴るような音がした。

「どうしたの？」

「許せねぇ！」

音は、真司が床を殴った音だった。

さっき、「片づけて。」と言った傍から、真司はテレビに齧り付いたまま。プリントも、飲みかけのペットボトルも、ゴミも散らかったまま。何も片づいてなんかいなかった。

私の中で、何かが音を立てて切れた。

「何も、片づいてないじゃない。」

真司が、びくっとして振り向いた。その時の顔は、まるで、いた

ずらが見つかったような、それでいて、どこか怯えたような感じ。
いつもとは、私の声が違うことがわかったのかも知れない。
「何してんの？自分の部屋じゃない。何で、私が片づけてんのよ？」
「へ？」
私はその瞬間、掛けていたエプロンを床に叩き付け、バッグとカーディガンを掴むと、部屋のドアを開けた。
「杏！」
「放してよ！こんなの、もう嫌！」
真司が私の腕を放した瞬間、私は部屋を出て、玄関に立っている真司に一言、言い放った。
「もう、別れる！」
それだけ言って、エレベーターに駆け込んで、マンションを飛び出した。
それから家に着いたのは２０分後。どこをどう歩いたのかもわからなかったけど、真司に追いかけられるのが嫌で、いつもとは違う裏通りを歩いた気がする。
「ひっ……く、ひっ……く……。」
その夜、私の部屋には、嗚咽だけが響いた。
次の日、私にしては珍しく、昼まで寝ていた。いや、正確に言えば、徹夜したのだが、布団から出なかったのだ。
しかし、いつまでもそうしているわけにもいかず、着替え終わった所に、インターフォンが来客を告げた。
「はい？」
「阪田です。置いていった物、届けに来た。」
泣き腫らした今の状態では、とても外まで取りに行くわけにはいかず、オートロックを解除して、部屋の前まで来てもらうことにした。
ドアをノックする音がして、少し泣き腫らした瞼でドアを開けると、紙袋を提げた真司が立っていた。
「ありがとう。」

「じゃ。」
そう言って背中を向けた真司を、私はシャツを掴んで引き留めた。
「昨日は、ごめんなさい……。」
「あぁ。」
顔をシャツに押しつけると、昨日、あれだけ泣いたのに、まだ涙が溢れてくる。
「自分で、決めたことだろ？別れるってのは。」
「……うん。」
真司はそう言って私の方を向くと、小さい子をあやすように、頭を優しく叩いた。
真司はいつも、私が泣くとこうして泣きやむまで抱いていてくれた。でも、それも今日が最後。その内に、彼は他の女の子を抱く。私も、こうして抱かれるのは真司ではなく、他の男性になるだろう。
「ねぇ、別れたけど、まだ、友達としては付き合ってくれる？」
「友達としてなら、ね。」
顔を上げると、真司が、ふっと笑った気がした。「しょうがねぇ。もう少し、我儘なお姫様に付き合うか。」とでも言い出しそうな感じで。
「それじゃ。」
「うん。ありがとう。」
しかし、それからの私たちは、それまでと比べて、1割くらいしか話さなくなった。それも、必要最低限の会話だけになった。

「別れちゃった。」
「はい！？」
学食でご飯を食べながら言うと、大石君はテーブルを挟んで、顔を寄せてきた。
「また、何で？」

「……。」
「今日の夜、飲みながらでも聞こうか？明日、休みだから。」
「うん。」
大石君は、その夜、ビールやらチューハイやらを持ってきてくれた。
「……と、いうわけなの。」
「結構、あっけなかったんだ？２年も付き合ってて、俺らから見ると、すげー仲良かったのにな。」
「うん……。本当は、去年の秋からやばかったんだ。」
「そんなふうには見えなかったけどな。」
「人前じゃ喧嘩とかしなかったもん。気付かなくても仕方ないよ。」
「でも、それならそれで良かったんじゃない？いつまでも付き合ってると、多分、よけいにストレスたまって、お互い追いつめるだけだろ？杏って、結構体弱いだろ？すぐに体調崩しそうでさ。」
「うん……。」

そうこうしている間に、秋になり、今年も学園祭の時期になった。
「たこ焼き１パックー！」
「はい、＼２００ね～。」
私はサークルの展示発表のシフトで時間を見つけて、お昼ご飯にと、たこ焼きの模擬店に並んだ。鉄板の上では、鰹だしのいい匂いをさせて、クルクルと回転されたたこ焼きが焼き上がっていく。
毛糸の帽子をかぶって、その焼いている男の子の顔を見た私は、彼に思わず声をかけた。
「田中君？」
「へ？」
その男の子が顔を上げた。
「えっと、どっかで会った？」
「心理学研究会の、吹雪杏です。」
「……あぁ、吹雪さんやん。むっちゃ久しぶりやな。もう２年ぶり

やんな～。」
彼の口から、会った時と全く変わらない、人なつこい関西弁が聞こえる。
「知り合いか？」
田中君の隣の男の子が、彼を肘でつついた。
彼とは、1年生の仮入部の時に知り合ったけど、その後の夏休み以降、彼は授業が忙しくなって来れなくなり、そのまま疎遠になっていた。教職の全学部合同授業で顔を見ることはあったが、お互いに友達と話していたりして、声をかけるのがためらわれていた。
その場で携帯の番号と、メールアドレスを交換した私たちは、その日からメールのやり取りをするようになり、仲良くなっていった。
それから彼とは、私の友達が脚本を担当した劇団の演劇を見に行ったり、就職活動の愚痴を聞き合ったり、お互い、前期中に希望の会社で就職の内定が取れた時は、肩を叩き合って喜んだりもした。たまには2人でお酒を飲んで、酔いつぶれた彼に私が膝枕をすることもあった。こんな時の望は、とても素直で、幼い男の子のようで、私の母性本能をくすぐるには充分だった。
そんなふうに、人なつこくて、気の置けない望を、いつの間にか私は意識するようになった。

彼と再会した次の日、私は自分の部の模擬店前で、売り子をやっていた。図書館の前では、これからイベントがあるらしく、人がたくさん集まっている。ミキサーの女の子の、ノリノリのご機嫌な声も聞こえる。多分、私の友達で、今日もチャイナドレスでも着ているのだろうか。
その人だかりの中に、私は、ここ数ヶ月見かけなかった懐かしい顔を見つけた。その時、一瞬だけど、周りの景色が全て、モノクロになったような感じがした。
「真……司？」

その隣に見つけたのは、見覚えのない女の子。私なんかよりもずっと可愛くて、華奢で、男の子だったら、間違いなく守ってあげたくなるような、そんな子。
それを見ていたサークルの同期の男の子の1人が、
「真司には、1ヶ月くらい前に、梨花女子大の彼女ができたんだよ。」
と耳打ちして教えてくれた。
（真司に、新しい彼女、か……。）

気付けば4年生も終わりに近づき、1月半ばになって、私たちはやっと卒業論文を書き上げた。残るは学年末試験と、卒業論文の口頭諮問、卒業式を残すだけになった。
その日、私はサークルの友達と一緒に、卒業式で着る袴を選びに、貸衣装のお店に来ていた。
「で、最近どう？」
一緒に選んでいた綾瀬夏見が、薄いグリーンの地に白い牡丹が描かれた着物を手にして言う。
「どうって、何が？」
「田中君に決まっとるやん。」
同じサークルのため、彼女も彼のことをある程度は知っている。
「卒業論文が終わったって言ってた。」
「そんなことを聞いてるんじゃないの。言いたいこと言ったん？ってこと。」
「？」
夏見は溜め息をついた。
着物と袴を決めて、レンタルの予約をして店を出た私たちは、すぐ近くのスターバックスに入って、コーヒーを飲むことにした。
「言いたいことって、何？」
本日のおすすめ（今日はキリマンジャロ。ちょっと豪華）をすす

りながら、向かいの席でモカを飲んでいる彼女に聞いてみた。
「好きなんやろ？彼のこと。」
「え！？そ、そりゃ、好きだけど……。何でわかるの？」
「今さら何言っとんの？見てればバレバレ。メールきたらすごく嬉しそうな顔するし、彼の話題は多い。気付かない方が鈍いわ。」
「そんなに？」
「うん。で、そろそろいいんやない？真司君と別れて、もう1年半もたつんやろ？」
「何が？」
「杏……、今日は何月何日？」
「1月30日。」
「再来週は何があんの？」
「旅行から帰ってくるけど？」
「あんた、天然すぎ。……2月14日よ。バレンタインやんか。」
（実はしっかり忘れてた……。乙女失格かしら？）
「……で？」
まさか……。
「まさか、チョコ渡せとか……。」
「そのまさか。最後には杏が決めることなんやけどさ、見てるとほんと、いじらしくてね。」
「う……。」
その帰り、私は夏見に背中を押されて、近くのショッピングセンターで、チョコとアザラン、ハート型のアルミカップを買った。
「チョコ作るなんて、4年ぶりだよ～／／／。」
真司と付き合っている時には、面倒くさがってチョコなんか作らずに、コンビニで買ったものをあげていた。この前、まともに作ったと言えば、高校卒業前に、同期の元生徒会の男の子たちと、バイト先の人にあげた義理チョコだけ。

その後、私が家に帰った後、望に電話をした。
「ねぇ、来月の１４日は空いてる？」
「うん。どうした？」
「遊びに行ってもいい？」
「えぇよ。夜になったら、ドライブにでも行かん？この時期、すっげぇ星見えんで～。」
「うん。」
望と会う約束をした私は、いそいそと旅行の準備を始めた。
「ふぁ～、もう１時だ。寝なきゃ……。」
そう思って布団に入ったけれど、なかなか寝つけない。その内に、真司と別れた時のことを思い出した。
（あの時、もっと我儘言っても良かったかな……。そしたらもう少し、真司と上手く続いたかな……。）
（でも、あの時別れなくても、いつまで続いたか……。）
（でも、いつの間にか話すこともなくなって、そうしたら、話すことすらできなくなって、……。）
仰向けになった私の頬を、何かが滑り落ちた。
（涙……？何で、私、泣いてるの？未練？でも、真司とは、別れてもう１年半になるのに、何で、今さら未練なんか……。）
「ひっく……。」
真司と別れたころ、何度、夜にこうして１人で泣いただろう。その数は、もう数え切れない。
その夜は泣いて、そのまま寝てしまったらしい。気が付いたら、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

「ん……、明日はバレンタイン……。チョコ作らなきゃ……。」
それからおにぎりをかじりながら、湯煎でチョコを溶かして、型に流し込んで、縁にアザランを１つずつ飾って、１時間半かけて、やっと、５つのハート型のチョコができあがった。

「……４年前とデザイン変わんないけど、ま、いーか。不器用な私にしちゃ、上出来でしょ。」
そう言いながら袋にチョコと、「Ｈａｐｐｙ Ｖａｒｅｎｔａｉｎ Ｆｏｒ Ｎｏｚｏｍｕ！」とかわいらしく書いたカードを詰める。
「うん、我ながら似合わない、かわいいチョコだこと……。」
そのチョコを、溶けないように冷蔵庫のドアポケットに入れると、今度は洗面用具や着替えを鞄に詰める。
「服は……夜寒いからジーパンにしようかな。」
準備を終わると、外は既に暗い。
「明日は、晴れるといいな……。」

次の日はすっきりとした青空が朝から広がっている。この分なら、夜も晴れてくれるに違いない（かなり希望的観測だ）。
「……よし。チョコ入れた、洗面用具に、着替え入れた……。」
望との待ち合わせは午後の４時。私の家からは電車で１時間くらいかかるから、そろそろ家を出ないといけない。
「うん、行くぞ！」

「あのね、これ……。」
そう言って、ドライブ先の湖岸道路の駐車場で、シートを倒した状態で星を見上げている望に、バッグの中からラッピングしたチョコを取り出す。
「何、これ？」
「今日は何日？」
「２月の１４日。……あ。」
「……今年、唯一作った、本命なんだから。」
あぁ、どうして、こう、可愛くない言い方しかできないんだろう。こんな時は、本当に意地っ張りな自分の性格が恨めしく思える。

「ありがとう。」
そう言って笑った望は、袋の口を結んでいたリボンを解き、チョコを取り出す。
「結構、頑張ってくれた？」
「……うん。」
チョコをアルミカップから出すと、望はチョコを口に放り込んだ。
「旨いよ、これ。」
当たり前じゃない。いくら私が不器用でも、温度無視して、溶かせばいいチョコのセットなんだから。
「で、返事なんだけどさ、……。」

Ｆｉｎ

（後書き）

一年ほど前に書き上げた作品ですが、日の目を見る機会がありませんでした。作品中で、杏が泣くシーンがありますが、これは、私が実際に体験した事をもとに書かれています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0867a/

昨日は思い出、そして、明日へ

2010年10月8日15時56分発行